

蘭学者 柴田収蔵

(平成五年二月二十一日講演)

江戸時代末期、ペリー来航の前年に日本人としては初めての卵形の世界地図を描き、その地図に「日本海」という名称を登場させた人物がいました。小木、宿根木出身の柴田収蔵であります。その地図にはパリやロンドンとともに「シユクネギ」が書き込まれております。

そこで今日は、「シユクネギ」の百姓の家に生まれた青年が海外に目を開き、漢学、蘭学、地理学を学んで幕府の蕃書調所の絵図役に採用され、三十九歳の若さで生涯を閉じた柴田収蔵をとりあげて、お話しみたいと思います。

柴田収蔵の生きた江戸時代の佐渡の経済の中心地は小木半島でした。なぜ小木が繁栄したかといえますと、小木港は江戸時代の初めに大久保長安が開いた銀の積み出し港として栄えていたからです。そのころ銀は、相川と小木を結ぶ小木街道を通して、小木から出雲崎へ運ばれ、信濃（現、長野県）を経て江戸へ運ばれていました。ところが寛文年間（一六一一—一六七三）になりました。金銀山が衰え、小木港は米の積入港としても振るわなくなりました。

しかし幸いなことに、河村瑞賢という地理や土木の術に優れた江戸の商人が西廻り航路を開いたことによつて、小木は回船の寄港地として再び賑わいを見せるようになりました。

皆さんは、なぜ新潟港ではなかったのか、と思われるかもしれませんが、新潟港は浅くて多くの船が入れなかったから小木港で札をとつて新潟入港の順番を待ったわけです。

小木港の西向きの灣入を「内の澗」といい、東向きを「外の澗」と呼びましたが、その内の澗と外の澗を船が往来できるように水路が切られました。その工事には一万人もの労力が使われたといえます。

江戸時代も中頃になりますと、正確には宝暦元年（一七五一）ですが、佐渡の米やその他の物資の他國出しが許されるようになりましたから、小木港はその積出港として大変栄えました。また、さまざまの物資が他國から運び込まれるようになって、回船業を営んで財をなす人たちが次々と現れてまいりました。

皆さんおなじみの「佐渡おけさ」も、回船の船乗りたちによつて佐渡に持ち込まれたもので、元唄は九

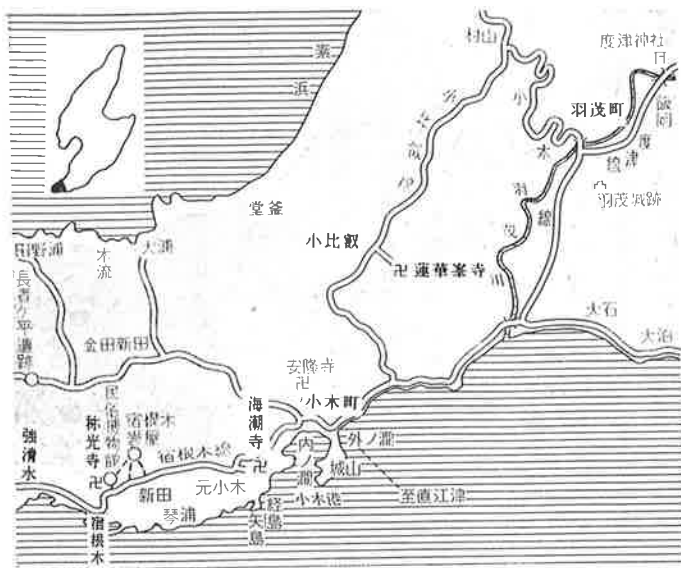
州の「ハンヤ節」です。(詳しくは、第一集「佐渡おけさと相川音頭」をごらん下さい。)

小木の繁盛ぶりを示すエピソードを一つ、申し上げましょう。「小木では浜へ出て石を叩いておっても日当になる」といわれておりました。どういふことかといえますと水主——今でいえば一等航海士のことですが、水主が泊る宿屋で、遊女屋も兼ねていたのが「付舟宿」と呼ばれた所でありまして、その付舟宿に雇われていた人が浜へ出て、潤に入る船を待っている。船が入るまでにはかなり間がありますから、ヒマつぶしに石で石を叩いたりして遊ぶわけです。やがてはるか沖に白い帆が見えてくる。その帆印から船名を割り出して、大宿または付船宿に知らせるだけで日当が貰えたというのです。入船千艘といった感があったのでしよう。

『佐渡年代記』という本には、一八四二年の記録に「小木に飯盛女の宿が五九軒あって、七四人の飯盛女がいた」ということが載っております。飯盛女たちは他国の船が入ると、宿から三味線をもって付船宿へ呼ばれて行ったのであります。

これで大体小木港の歴史的背景がおわかりいただけたかと思えます。柴田收藏についてお話する場合、単に彼がどういふ学問を収めてどんな仕事をしたか、というだけでなく、小木岬の回船の村からなぜ收藏のような人物が出たか、という視点からお話することが大切だと思っております。

さて、小木港から少し西に行ったところに收藏の生まれ



た宿根木村があります。現在は七十軒ほどの小さな村ですが、大変古い歴史がありまして六百年ぐらい前（南北朝時代）には越後からの渡海場だったのです。その後、小木港に表玄関としての地位を譲ってからはひっそりとした漁業の村になってしまいました。

しかし収蔵の生まれる半世紀ほど前から、宿根木村は再び脚光を浴びるようになりました。それは佐渡奉行所が年貢米を大坂に送ることを決め、年貢米の運送を宿根木の回船業者たちに託したからです。行きには年貢米を積み、返り荷には大坂で買った紙、砂糖、綿などを運賃積みで新潟へ運んだのでした。当時新潟の回船が衰えつつありましたから、宿根木の回船が大いに発展しました。

ですから宿根木村は、佐渡でも屈指の金持ちの村だったわけです。その頃には民家が一二〇軒あって、そのうち回船持ちは十軒。十三艘の千石船が一〇〇人の舟乗り（宿根木出身者は五十人）を乗せて年貢米を運んでいたのです。

そんなわけで宿根木村が最も活気に満ちた時期に収蔵は、百姓長五郎の長男として生まれました。文政三年（一八二〇）のことです。父は五反ほどの田畑を持っていましたから、村では長百姓だったといえましょう。村の重立むなだち八人の一人として、元禄検地のときには案内人もつとめております。父はほかに魚の干物を加工する漁師（四十物師あいちゅうし）でもありました。



柴田収蔵自画像

収蔵は少年時代、同じ村の回船業者、高津終平（号は郡山びざん）から読み書きの手ほどきを受けております。高津は若い頃は「権現丸」の船頭として働き、船を下りてからは子供たちの教育に情熱を注いだ人でした。高津の家には回船持ちや小木の間屋、商人などが入りしておりまして、それぞれ自分の眼で他国を見た視野の広い人たちばかりでしたから、話題も豊富でさまざまなことが尽きることな

く話されたのだろうと思います。

そのような環境の中で学んだ収蔵が、オランダの医学や世界地理学に関心を持つようになってゆくのは

ごく自然のことで、その素地をつくったのが高津終平です。

ほかには同じ村の称光寺（時宗）の寺家で、法受院の大順という人物から「四書五経」の素読を習っています。収蔵が生涯を通じて儒教的な考えを持ったのは、高津終平と法受院の大順の二人から受けた影響が大きかったのだろう、と私は考えます。

収蔵は子供の頃から手先が器用であつたらしく、米粒にイロハ四七文字を彫つたものが今でも小木町に残されております。彼のその才能を見出した人物が、佐渡奉行所の絵図師、石井夏海であります。

なぜ石井の眼に止まったかといひますと、父長五郎が宿根木村の名主でしたから、時おり佐渡奉行所に  
出向いておりまして、その用向きは村方が他国に出かけるときの願書に奉行所の請判をもらうとか、村の  
境界争いにかかわる訴訟文を作って提出するなどの、村の行政に関するものがほとんどで、たまたま提出  
文書の中に収蔵の描いた村絵図があり、そのすばらしさに石井が瞠目したからなんです。

それで石井は長五郎に、収蔵を江戸に出して篆刻の技術を身につけさせるよう説得し、認めさせました  
が、もしもこの時石井の勧めがなかったならば、おそらく蘭学者柴田収蔵は生まれなかったにちがいない  
と私は思います。

収蔵の運命を決定づけた石井夏海という人物について申し上げておきますと、この人は相川に生まれ、  
江戸に出て谷文晁（南画家）から画を、司馬江漢から西洋式の測量術を学んで佐渡に帰り、佐渡奉行所の  
絵図師を命ぜられておりました。この頃奉行所は佐渡の二六〇余の村絵図の作成を命じていたのです。そ  
のとおりまとめを石井夏海がしていたわけです。収蔵は、石井家の玄関に置かれていた地球儀をはじめ見て  
て、世界地図に限りない夢をふくらませたのでしよう。

さて、収蔵が二十才のとき、讃岐（現、香川県）の金毘羅詣での旅に出しております。便乗したのは親類  
の石塚市三郎の「幸栄丸」（九〇〇石積み）。御城米を積んで大坂に航海する回船に乗り、琴平（現、仲

多度郡琴平町)の金毘羅宮に参詣したのですが、收藏にとって他国に出るのは初めてでしたから、彼は二カ月に亘るその体験を綴り、『金毘羅詣船路の記』という日記を残しております。

收藏の注目すべきは、これ以降一五年間日記を書き続けていることです。その全部が現存しているわけではありませんが、興味がありましたら、皆さん読んでみて下さい。『柴田收藏日記』(田中圭一編注、東洋文庫、平凡社刊)の大きな特徴は、ひとことと言えば村人の生活ぶりを村人の立場から綴ったものでありますから、内容はきわめて日常的で具体的な生活の様子がわかることです。こういう資料はほかにはなく、大変貴重なものであります。

收藏が金毘羅詣でをしてから二年後、つまり天保十二年、彼は江戸に出て、高田藩儒者、中根半仙のもとで篆刻を学びました。よほど上達が早かったのでしょう、数カ月ほどで技術を身につけて郷里に帰ってまいります。收藏はこの頃すでにオランダ語に興味を持ちはじめており江戸でオランダ語の入門書(『蘭がらてい学階梯』大槻玄沢著)を買い求めています。

帰郷後とはときどき家業の手伝いもしたでしょうが、一年の大半は相川の石井夏海のもとで地図の作成に没頭しました。

当時石井は、伊能忠敬の作成した地図と在来絵図を照らし合わせたり、訂正したりする仕事をしておりましたから、收藏はその手伝いをしていたことになります。

皆さんもご存知のように、日本の政界は外交問題をめぐって海防論で明け暮れていたときでありまして、日本海域にいつ外国船が現れないとも限らず、盛んに海防策の強化がとえられており、幕府は佐渡奉行所に対しても、島周辺の警備について注意を促していました。佐渡奉行所では佐渡地図のほか、日本地図、世界地図の作成作業が進められていたのです。

こうした緊迫した状況の中にあっても、收藏はたゞ海岸測量図にのみ情熱を傾けていたわけではありません。この作業を通して外国の文字や風俗、そしてその背景にある文化にまで関心を寄せはじめていました。

その頃外庄といえ、大部分がロシアをめぐってのものでありまして、収蔵の関心も、ロシアに漂流した伊勢光太夫（大黒屋光太夫）の記録「光太夫の漂流記」（『北槎聞略』）を借りて目を通すことでした。佐渡の人が、そのような書物を書き写して持っていたのですから驚きです。それは読むためにだけ写したのではなく、蝦夷や松前との交流を通してロシアに関心を示していたことでありましょう。

収蔵が結婚したのはこの頃です。村の回船持ちの石塚市三郎の娘を妻にしましたが、長くは続かず間もなく離縁となります。妻側から離縁の話が持ち込まれたのです。ほどなく妻は、眼を患ったときに治療をうけた眼科医のもとに去っていきました。

収蔵は傷心に打ちひしがれて小木を離れ、江戸で蘭方医、伊東玄朴の門下に入って、二年間医学の修業をしました。この間の収蔵の蘭学に対する意気込みは大変なもので、驚くべき読書量であったことが日記から察しられます。おそらく旧妻を見返すつもりで学び始めた蘭医学だったのでしようが、みるみるそのとりこになり、視野の広い人間に成長していきました。

弘化二年（一八四五）、医学を収めて郷里に戻った収蔵は、宿根木村の称光寺のもつ歎喜院を借りて医院を開業しております。五年間、毎日の診察記録を克明に書き残しておりました、これが今では江戸時代に西洋医学を学んだ人の診療の実態を知る唯一の資料であります。

収蔵は方便としての学問はやらなかった人で、その学風は開明的で、同時代の人たちに較べてみますとかなり進んでいたように思われます。

東西の医学について、こんな風に書いています。「お互いに相手を知らずして批判することは非難にすぎない。病気は食生活がもたらすものであり、食生活の違う東洋と西洋にそれぞれの医学があるのは当然ではないか」と。処方においては必要とあれば、彼は野山で薬草をとって漢方薬を作り、不足分は西洋医薬からとっていました。

皆さんは、このことを中途半端だという風にお考えにならないで下さい。収蔵は東洋医学の主体性を保

ちながら洋学を受け入れるという、きわめて自由な考えの持ち主だったというほかに、彼のやり方が村の人たちに洋学の成果を自然に受け入れさせるものになったのだと私は思います。

そして彼は「医を術」とのみ考える世相をきびしく批判しております。「医者は薬を練り、処方すればよいというのではない。医書を読み、古書を読み、学問をすることが医者のとめである」と。

事実、収蔵の読んだ本が大変な冊数にのぼることが日記からわかります。診療に当たっても、それらの書物と首ったけで勉強して、処方しておりました。また、漢方医の世界では權威にかかるからと避けていた患者の前での「処方についての討論」も、収蔵は蘭医たちと何のこだわりもなく行っております。

天保期といえますと、皆さんはこんな風に想い描くのではないでしょうか。「日本中に大飢饉が起きて、沢山のひとが餓死したこと」や「病気にかかれば死を待つしかなかったこと」、そして佐渡の百姓たちが「一国騒動」として歴史に残る百姓一揆を起こしたことなどを。しかし収蔵の日記からも察しられるように、医療に対する考え方はかなり進んでおりましたから、一般に伝えられているような状態——貧しさや忙しさのために病人を放置し、死に至らしめた、というようなことはほとんどありませんでした。

開業してほだなく収蔵は再婚しております。医院の近くの青木清十郎の養女ふくを妻として迎えました。落ち着いた生活が始まり、収蔵は医業のかたわら「万国全図」の作製に取り組みました。

当時は本が手に入りにくかったため、他所から借りたわけですが、収蔵は借りた医学の本と世界地図を日課として写しております。彼が本を借りたり、意見を交わすなどして強い影響を受けた人物が、佐渡でもっとも年長の洋学者、藤沢明卿ふじさわあきむねです。両津の湊で生まれ、江戸で高野長英の門下生となり帰郷後、蘭方医として活躍した人でした。

ほかに収蔵がよく意見を交わした人物を挙げますと、松ヶ崎の金田六左衛門であります。父の代から蠟ろうの請負商人として他国から蠟を輸入して利益をあげた人ですが、次第に他国からの輸入ではなく、佐渡で蠟を作りたいと考えるようになり、原料となるハゼの木の種を越前三国みくにから求めて自宅の畑に蒔きました。



やがて芽が出て育ちましたが、ハゼの木を植え替える広い畑がありません。

そこで六左衛門は奉行所に願ひ出て、小木半島の池野平付近の御林（官有林）の開發許可を得たのです。こうしてハゼの栽培と蛸づくり（現、北海道）に成功し、はじめて佐渡産の蛸が蝦夷地（現、北海道）に向けて輸出されることになったのです。

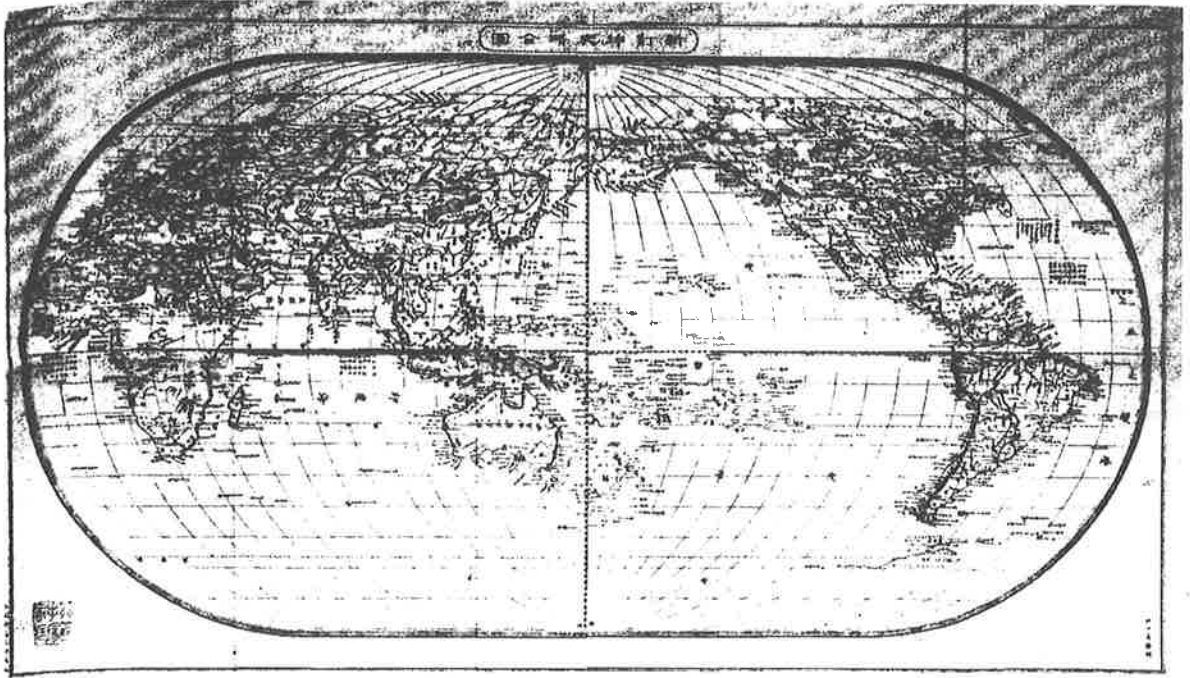
そのほか沢山の回船商人や医師たちからも収蔵は、書物を借りて新しい知識を得ることに懸命でした。また回船商人たちも単に商売にとどまらず、江戸で学んだ収蔵から、その知見を吸収しようと努めています。このことは、収蔵をとりまく多くの開明的な人たちが世界を視野に入れて行動する時代が訪れていたことを示しているのだと思います。

嘉永三年（一八五〇）、収蔵が三十才のとき三度目の江戸行きを決意します。江戸では伊東玄朴の塾を訪ねて原書の図版を写したり、オランダ語の勉強会に参加したりしました。また洋学者で地理学者でもあった古賀謹一郎のもとでは、オランダ版の南アメリカの地図などを見せてもらい、それを借りて不眠不休で写しておりますし、収蔵自身が描いた卵形の地球図を示してアドバイスを受けております。

これがのちに江戸の春草堂から出版された世界地図「新訂坤輿略全図（しんていこんおんりやくぜんず）」であります。間宮林蔵の探検結果を取り入れ、カラフトとシベリアが分離された日本人で初めての世界地図を描きました。佐渡には「相川」と「シユクネギ」が書き込まれています。「日本海」も載りました。

この頃の収蔵は医学よりもむしろ世界の地理、さらには世界の文化全般に関心を抱きはじめました。ほかの人たちにはまねのできない地図づくりを得意とした収蔵ですが、それだけでは満たされず、「日本人としての自分が世界地図に何を加えることができるのか」と真剣に考えて、より精密な地図の作製に励んだのでした。事実、この人の地図の精密なことは一頭地を抜いていたのであります。

収蔵のもとに父の訃報が届いたのは、安政三年十月末日でした。父は息子の帰国を待ち兼ねて、その一



「新訂坤輿全圖」 （「佐渡の歴史」郷土出版社）

月ほど前に宿根木で亡くなっておりました。故郷を離れて七年が経っており、すべては父の反対を押し切った行動でしたから、さまざまの想いが胸中を去来したのでしょう。その日の日記には「夜半、郷事を思ひねむりがたし」と書いております。

この年の十二月に収蔵は、世界地図についての見識が買われて蕃書調所の役人に任命されました。百姓の息子がそこまで出世するのは異例のことであり、佐渡奉行所でも「前代未聞である」と江戸に在った佐渡奉行は祝ってくれました。もしも父が生きていたなら、息子の学問のために大金をついやして報われたことを、どんなに喜び、誇りに思ってくれたことでしょうか。

翌年の春、収蔵は妻子とともに郷里に帰りました。しかし迎えてくれる父もなく、二ヵ月ほどで江戸に永住する決意をして島を去っております。

幕府の役人となり、黒船のむこうに世界を見るような時代の波が押しよせていた幕末、収蔵はその活躍を期待されながら果たせず、江戸の宿で病を得て四十才に満たない生涯を閉じました。安政六年（一八五九）四月十日のことです。

収蔵と同じ塾で友人だった陸奥宗光（日清戦争当時の外務大臣）が追悼文を書いておりますし、勝海舟が書いた「洋学者推せん名簿」五十八名の中に柴田収蔵が入っております。彼は幕末有数の洋学者だったのです。

佐渡の洋学の先がけとなった柴田収蔵。小木岬の海にのぞむ小さな回船の村の百姓の息子が、父の跡をそのまま継げば生涯安泰に生活できたであろうに、その青年をして江戸に向かわせました。

海に向こうにある未知なもの、新しいものにあこがれ、篆刻を学び蘭医学を収め、医療の実践者としてとどまることなく、彼の関心は世界の地理から世界の文化を吸収することへと高まってきました。

幕末の日本では、すでに身分に関係なく志を貫く者には活躍の場が与えられる時代が訪れていたということがあります。

佐渡の洋学は、やがて柴田収蔵と同じように、海に面した新町村しんまちむらに生まれ、江戸で儒学、医学を学び、一蘭医に終わることなく、西洋文化を理解するための語学を学ぶことに情熱を注いだ司馬凌海しばりょうかいへと受け継がれていきました。

外国の文化にあこがれるということは、自分の周囲を客観的に見つめ、何をとり入れるべきかを考える眼を持つことであると思います。

(了)

(注) 第三集の主な人物の略歴は「参考資料」に一括掲載しております。